

## 共同研究の「範列編成装置」

ハロライズム

藤本 憲一 (※)

多くの大学や研究所文化が花咲く京都学派、もつと広げて『KANSAI Schule』\*の中心として、互いに鎬を削る連山連峰間に共同研究の尾根道を通し、ときに登頂困難な孤立峰にも登攀ルートを築いて、コネクティングしていったCDIの功績は大きい。

多彩な相手とコラボするだけでなく、ときにインディペンデントな研究機関として、「生活財生態学」など独自の持続的な自主研究の水準を示している点は、誰しも認めるCDIのレガシーといえよう。

現風研経由で多田道太郎さんの生活美学研究所(武庫川女子大学)に拾ってもらうまで、おもに大阪を舞台に一九八五年から一九九二年にかけて編集者・コピーライター・プランナー・シンクタンク研究員として、たつきを立ててきた当方にとって、京都のCDIは、「同業者」と呼ぶにはあまりに恐れ多い、憧れの存在であった。

この間、日本の文化産業は、バブルの波に洗われ、踊らされ…その紙価は激しく乱高下した。あげく、その経済的価値たとえば、新聞雑誌書籍の原稿料・講演料は、当方が月刊誌編集者として、森毅さん(はつきりものを言う数学者)をして「キミのこと」、えらい原

稿料安いなあ。もうちょっと、なんとかならへんの？」とベア交渉に臨んでいた三〇何年前より、ずっと相場が下がっている(もとより一部有名作家を除く)。

そのころ、資金が有り余った生保やゼネコン、エネルギー企業は皆おしなべて、だぶついたバブルマネーを「文化」に両替えしたがっていた。当時は純粹に、資産を増やすだけなら土地や株に投資すれば、どんどん値上がりしたのだが、おそらく「いつ弾けるかもしれない」という漠然たる不安があったのか…いや、むしろ絶対安定資産たる純金の延べ棒にでも替えておけば、今頃は左団扇だっただろうに。なぜかお金持ち企業に限って、「文化的な何か」に憧れ、バブルマネーを「文化」と両替えしたがったのだ。

それは「メセナ」と呼ばれるブームとなつて、うまく長期的な社会貢献や企業ブランディングにつなげた企業もあったが、たいていは美術工芸品や箱モノをコレクションしたり、文化イベントを打ち上げたり、といった一過的な営みに終わった。当時シンクタンクに在籍していた当方は、あまりのコンサル依頼件数の多さ、金額の大きさに眩暈を起こし、対症療法的なクライアント対応に追われ、それぞれの企業にふさわしい「文化的両替」戦略については、うまくコンサルティングできなかつた。それどころか、われわれ担当者が疲弊・忙殺され、シンクタンク企業そのものの財務体質は美味になり、バブルが弾けるや、たちまち経営難に陥った。

当方が担当した案件だけを見ても、一番安い案件でも、わずか人口一〇万人の郊外都市

(※) 一九五八年生。阪

大大学院修士修了後、シンクタンクを経て、武庫川女子大学生活環境学部教授、情報メディア学科長、嗜好品文化研究会幹事、『ボケベル少女革命』メディア・フオークローア序説』(星雲社一九九七)は、テレコム社会科学奨励賞(財団法人電気通信普及財団)、ドコモ・モバイル・サイエンス奨励賞(NPO法人ドコモ・モバイル・フロンティア財団)などを受賞。

\* KANSAI Schule.

藤本憲一「メディアの考現学から、文学・美学へ」  
『KANSAI Schule』  
無意識転々『学士会会報』(八三三)二〇〇一

のコンサル業務でさえ年間二〇〇万円、現在、大阪ドームとして知られるプロジェクトの  
 代案を練るコンサル業務は年間数千万円に達していた。この金額になると、担当者もビビ  
 るわ消耗するわ、会社の財務も荒れるわ：まったく躁病に憑かれた、異常な時代だった。

結局、当方が在籍したり、出入りしていた文化関連企業はほとんどすべて消滅し、一九  
 九〇年代を超えて生き残ったところは稀だ。文化領域に流入したバブルマネーだよりの経  
 営になったことで、乱流に呑み込まれたのだろう。やはり文化は経済の関数であり、しよ  
 せん経済の上部構造にすぎないのか？

いや、必ずしもそうではない、という証左を、われわれに示してくれたのが、CDIほ  
 か、乱流サーフィンを巧みに乗り切った、ごくわずかの団体である。

CDIが今なお現役の文化事業体として、五〇年を超えて長らえているおかげで、当方  
 らは安んじて、社会調査法の教科書に「生活財生態学」の項目\*を立てることができ、そ  
 の参照先が過去の遺産ではなく、現在進行形である点を記載できる。

また、この内容を大学院で、社会人院生に講じたところ、京都に通ってたびたび足田正  
 博さんに師事し、自ら起業したコミュニティ・ビジネスやコワーキング・スペース事業\*  
 の基礎理論として、実地に活用してもいる。

さて、CDIといえは共同研究のメッカであるが、武庫女に赴任して間もなく、「共同研  
 究論」の著書もある多田さんに、「共同研究のコツはなんですか？」と尋ねた（正直、ちょ

っとボスにヨイショする気持ちがあった）。すると意外や苦虫をかみつぶした顔で、「共同  
 研究は、必ず割を食って損するもんが誰か出てきよる。それが難しいんや。ボクなんかも  
 エライ苦労したわ」とのたまった。しかも、設立まもないHRI（オムロンヒューマンル  
 ネットランス研究所）とのコラボが実際に始まると、「共同研究は飲食が命なんや」と、研究  
 会後半の時間帯は必ず共食しながら、となった。当時まだ気楽な若手であった当方などは、  
 ずいぶん共同研究（とくに共食！）をエンジョイさせていただいた。立場を問わず日々発  
 止、デイスカッションするのが大事（けっして余興的な懇親会ではなく、こっちがメイン）  
 なので、微醺の勢いに乗って、ときに逆鱗にもふれたが、まあ若かったし苦にならなかつ  
 た。逆に、共食を伴わない会議、とくに昨今のZoom会議はまったく意気が上がらない。  
 そのアイデア、舌のひらめかなさ加減と言ったら、我ながらあきれてしまうほど。絶望的。  
 ボスの逆鱗に触れる、余計ないらんことを言おうにも、まったくその気が起きない。

今もCDIを中心に続く共同研究の場では、個々の研究の中身について話し合う時間よ  
 り、どういうゲスト・ホストで研究会を進めていくか。恒常的な組織運営でなく、テンポ  
 ラリーな顔合わせのコーディネートション（高田公理さんの言う「人組み」）について、話し  
 ている時間の方が長い気がする。

極端なことを言えば、専門家なんて誰を呼んでも同じ、というわけではけっしてないが、  
 その相互入れ替え、組み合わせの自由は無限にある。それをどんどん、場面や状況にあて

\* 藤本憲一「生活財生態学  
 法——アートと日記をフ  
 イールドワークする」エ  
 藤保則・寺岡伸悟・宮垣  
 元編『質的調査の方法—  
 都市・文化・メディアの  
 感じ方』（法律文化社）二  
 〇二二所収

\* 喫茶部

△<https://www.facebook.com/kussabudesu/>

はめては外し、置き換えてはシャッフルしていく往復運動こそが、CDIのクリエイティブティではないか。いわば、共同研究を強力にオーガナイズする文法のような、いわば「ペラティウム範列編成装置」といえよう。

ときに「人組み」の相談は予定の時間内に収まらず、本日のゲストが着いてしまっても後も続き、そのゲストをも交えて、未知なる次のゲストとの出会いについて話し合うことになる。きつと多田さんなら、「おいおい、いくさが始まっとなるのに、まだ鉄砲にタマこめてる最中か？」と、戦中派らしい苦言を呈したことだろう。

しかし、このへんの自由で、ノビノビした感じが、非常にCDIらしくていい。こうして談論風発する、知のライブ・セッションの創造性（とくに共食の愉悦！）を、ぜひ次の五〇年にも継承していただきたい。関西の文化をリードする、稀有な独立系シンクタンクとして、次の五〇年に向け、たゆまず歩まれることを祈念いたします。

ISBN9784-921160-00-1 C1095

五〇年後のために

CDI創立五〇周年記念誌

五〇年後  
のために

CDI創立五〇周年記念誌

高田 公理	篠原 徹	澤田 芳郎	佐藤洋一郎	佐伯 順子	斎藤 光	斎藤 清明	栗田 靖之	木内 義勝	神崎 宣武	河合 満朗	加藤 秀俊	乙部 順子	奥山 脩二	大村 醇吉	大内 浩	臼井隆一郎	上野 征洋	上野千鶴子	岩見 和彦	伊藤 公雄	池宮 正才	伊木 稔	阿比留勝利	朝倉 敏夫
田端 修	戸所 隆	富永 茂樹	永井 良和	鳴海 邦碩	橋爪 紳也	橋本 敏子	波多野 進	原田 信男	半田 章二	正田 正博	彦坂 裕	藤本 憲一	藤原 辰史	前田 裕資	榎田 盤	松尾 宗次	松野 精	宗田 好史	森 政弘	矢野のり子	山極 壽一	山崎 正史	八幡 和郎	(五十音順)



五〇年後のために

—CDI創立五〇周年記念誌

発行 (株) シイー・ディー・アイ

発行日 二〇二〇年一〇月一七日

編集レイアウト 箕輪真紀 采尾直美

印刷 協和印刷株式会社 無断転載禁止

頒価 二五〇〇円